

第1回北海道SDGs推進懇談会 議事録

日時：平成30年7月23日（月）15：00～

場所：道庁本庁舎5階共用会議室

【出席者】

○構成員：有坂 美紀、大崎 美佳、柏村 章夫、木原 利幸、小泉 雅弘、定森 光
清水 誓幸、菅原 亜都子、鈴木 昭徳、野吾 奈穂子、吉中 厚裕

【五十音順、敬称略】

【11名出席】

○北海道：谷内計画推進担当局長、石川計画推進課長、渡邊計画推進課主幹

（石川計画推進課長）

みなさんこんにちは。ご案内の時間となりましたので、ただ今から、第1回目となります、北海道SDGs推進懇談会を開催させていただきます。本日は大変お忙しいなか、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。私、本日の進行を務めさせていただきます、計画推進課長の石川でございます。よろしく申し上げます。本日の懇談会の開催結果でございますけれども、後日、道庁のホームページで公開をさせていただきますので、ご了承をお願いいたします。今日の懇談会の終了時刻でございますが、17時を目途に進めさせていただきます。それでは、開会に当たりまして、谷内計画推進担当局長からご挨拶を申し上げます。

（谷内計画推進担当局長）

道庁でSDGsを担当しております、総合政策部計画推進担当局長の谷内と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。本日はご多忙の中、この懇談会にご参加いただき、ありがとうございます。SDGsの推進に向け、道でも4月に知事をトップとする全庁横断的な組織ということで、SDGs推進本部を設置いたしまして、推進ビジョンの策定に向けた検討や出前講座のようなもの、企業・団体の方と連携した取組などを進めている訳ですが、こうした中、皆様方はご存じだとは思いますが、6月には、今日懇談会にご出席いただいています下川町、札幌市、ニセコ町とともに、国から「SDGs未来都市」に北海道としても選定をいただいたところです。SDGsの推進は、道だけではなく、道民の方の取組や、企業や団体、あるいはNPOなど、各地域・各分野、色々なところに広がりを持って、様々な取組が展開されることが重要だと思っています。そうした意味で、私ども、年内を目途に、「北海道SDGs推進ビジョン」という名のビジョンを策定して、北海道としてどうやってSDGsを推進していくかという基本的な考え方や目指す姿、取組方法、あるいは色々なステークホルダーの方々の取組とか、そういったものを道民の方にわかりやすくお示しが出来ればよいなということで、ビジョンの検討を始めております。今日の懇談会は、そうしたビジョンの策定、あるいはSDGsの推進に向けて、色々な意見をいただきながら、ビジョンの策定

を基にしたSDGsの推進に向けた取組を加速化していきたいと考えているところであります。また、後ほどご説明をさせていただきますが、今、色々な地域や分野で、SDGs推進に向けた取組がされていると思いますけれども、そうした方々の取組を横に繋ぐようなネットワーク組織を立ち上げることが出来ないかということも考えております。そうした場で、情報共有や意見交換、あるいは連携した取組ですとか、そうしたものを作り上げることが出来ないかなと考えています。そうしたネットワーク組織の立ち上げについても、ご相談をさせていただきたいなと思っております。今、北海道でも様々なSDGsへの取組がされていると思います。ただ一方で、色々なところに十分に浸透しているかという、まだまだ足りない部分があるのかなと思っております。このビジョンやネットワーク組織など、そうしたものを活用しながら北海道におけるSDGsの取組、機運をもっと醸成していきたいと思っております。8月4日には、吉本興業さんが「SDGsウォーク」というものを企画していただけたということで、中島公園を出発とした、道民・市民の方がたくさん参加できる、気軽にSDGsを楽しめるようなイベントもされるということです。色々なところからそうしたSDGsの取組が広がっていただければと思っております。今日は短い時間ですが、ビジョンの策定に向けたご意見を中心となりますけれども、SDGs推進に向けて、色々なご意見を賜ればと思っておりますので、どうか忌憚のないご意見をいただけますよう、よろしく願いいたします。

(石川計画推進課長)

ありがとうございます。それでは早速お手元の次第に基づきまして、議事を進めて参りたいと思います。(1)の「座長の選出」でございます。資料1として、「北海道SDGs推進懇談会開催要領」というものをお配りしています。懇談会の目的ですとか、内容などについてはお示しをさせていただきますけれども、「5 座長」の欄をご覧いただきたいと思っております。座長につきましては、構成員の互選としてございます。この座長につきましては、懇談会の会議の議論をスムーズに進行していただくため、座長の選出をさせていただくことになっておりますけれども、どなたかご推薦などありますか。なければ、事務局の方で提案をさせていただきたいと思っておりますが、酪農学園大学の吉中准教授にお願いしたいと考えてございます。よろしいでしょうか。ありがとうございます。それでは、大変恐縮でございますけれども、吉中先生、座長をしていただいて、議論の進行をよろしく願います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。皆さん、こんにちは。酪農学園大学の吉中と申します。力不足ですけれども、ご指名により、座長ということで、今、局長からもお言葉ありましたけれども、忌憚のない意見の交わすお手伝いを少しでもさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。何名かの方には、先日お会いして少しお話ししましたけれども、酪農学園大学に去年の4月から来ておまして、その前は、国連の生物多様性条約の事務局というところで7年ほど仕事をしておりました。当時、ご存じのとおり、SDGs、ポスト2015アジェンダというのがニューヨークベースで議論が進んでおりましたが、その

とき、生物多様性条約の事務局では何をしていたかと言いますと、いかにSDGsの中に生物多様性の観点を盛り込んでもらえるだろうかということ、事務局ですのでやることに限りはあるのですが、色々なチャンネルを使ってしていたことを懐かしく思っております。そういう国連レベルでの話は、どうしても地に足のつかない議論だけのことになってしまうことが多く、物事が起きるのは現場ですので、現場でいったいどうやって実現していくのだろうかというのが、私の当時からのすごい関心事でした。というのも、国連に行く前、私は日本の国立公園の現場で働いておりました。特に北海道では、釧路湿原、阿寒、利尻礼文サロベツという国立公園で、まさに現場で地元の方と一緒に働いておりました。そういうところで、このSDGsがどう活用できるのか、そんなことを皆さんと一緒に勉強させていただきたいと思っております。つたない進行になるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。それでは、早速、議事に参りたいと思いますが、その前に、初めての方もいらっしゃると思しますので、簡単に一言ずつ自己紹介ということで、お名前、所属とこの懇談会にける期待みたいなのお話いただければと思います。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

みなさんこんにちは。RCE北海道道央圏協議会の有坂です。RCE北海道道央圏協議会というのは、国連大学のプロジェクトで、持続可能な開発のための地域拠点ということで、現在16カ所世界にあるものでして、北海道にも2016年に作った組織です。SDGsを掲げる前から、持続可能な社会・世界というものを作っていくということを、我々の使命として掲げてやっておりました。今回、このような場が出来て、本当に期待をしています。SDGsというものが公開性・透明性を持って、そして参加意識と当事者性というものをすごく大事にしながら作られてきたものですので、このプロセス自体もオープンで、誰でも参加できるような形になればいいなと思い、今回は参加させていただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

みなさんこんにちは。環境省北海道環境パートナーシップオフィスの大崎です。環境省が全国に8カ所設置している、環境分野の中間支援組織です。環境分野から、持続可能な地域づくりをしていくことを掲げており、環境省もすごくSDGsを推している昨今です。チラシも配らせていただいておりますけども、中間支援組織ということで、環境に関係する情報や人、物を繋いでいく、そういったことをやっています。今回、ここの場は、非常に素晴らしい場だと思っていて、開催していただき本当にありがとうございます。ただ、せっかくSDGsという冠をつけておりますので、バックキャストिंगというか、北海道のありたい姿というのはいったいなんだろうということを、再考出来るいい機会になると思っております。今の計画案だと、それを出来ていないというのが凄くさみしいので、そこをもう一度、皆さんで再考出来るような場が出来たらいいなという期待をしているところです。よろしくお願いいたします。

(Ambitious Farm・柏村 章夫)

みなさんこんにちは。アンビシャスファームの柏村と申します。私は、隣の江別市で農業をやっておりまして、持続可能な農業を考えたときに、従業員の働きやすい環境を作るだとか、女性が活躍するだとか、今一般的に言われているようなことを事業の中で取り組んでいます。それを突き詰めると、割とSDGsに繋がっているようなところがたくさんあるということで、私自身、SDGsという言葉は、出会ったのがまだ日も浅く、理解も浅いですが、先ほど話しにありましたように、一般市民も理解して一緒に取り組めるビジョンを作ると言うことで、私も素人担当ということで、勉強しながら、この協議会に関わっていただければと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(下川町・木原 利幸)

みなさんこんにちは。下川町政策推進課の木原と申します。下川町は、人口3,400人を切る小さな自治体でありますけども、これまで「環境モデル都市」、「環境モデル未来都市」、今回も「SDGs未来都市」ということで、持続可能な地域社会を築きあげていく上での必要なツールということで、今、町民の皆さんと一緒に下川町の2030年に向けてのありたい姿ですとか、来年度から始まります第六期の下川町の総合計画にこのSDGsを組み込んで策定をしていこうということで、様々な取組をしているところでございます。ジャパンSDGsアワードで、今回大賞をいただいた関係で、7月2日に吉本興業さんと連携を結ぶことが出来まして、早速今週末、下川町はジャンプの町で、平昌オリンピックで葛西選手、伊藤大貴選手、伊藤有希選手が出場しましたけども、彼等の表彰式がありまして、そこに吉本の芸人さんが来られるという、色々な繋がりを持って地域を盛り上げていただけているということで、大変感謝しているところです。どうぞよろしくお願いいたします。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

NPO法人さっぽろ自由学校「遊」の事務局長をしています、小泉と言います。さっぽろ自由学校「遊」は、市民が作る市民のための学びの場ということで、一年中、市民対象の色々な講座をやっております。テーマは多様ですが、人権、環境、開発、平和、多文化共生など、ある意味、SDGsと関連するような社会的なテーマを中心にやっておりますので、是非ご参加ください。SDGsに関しては、もともとESDという持続可能な開発のための教育に、教育の10年が行われている間に注目して、色々ESDに関わる活動をしてきました。その流れで、RCEのメンバーにもなっています。2015年からSDGsを意識した市民の取組を進めていて、既にお持ちの方が多くと思いますけど、北海道の地域目標づくりというワークショップを2016年に進めまして、それをまとめた冊子を作ったり、その第2弾で、北海道からの発信と言うことで、「SDGs×先住民族」という冊子を作ったりしております。今回、ここに参加できるのは、非常に今の関心とぴったりというか、北海道の地域目標づくりというのをやってきたことをどう活かせるかと考えておりますし、あまりこういうところに参加する機会は多くないですが、SDGsの、「誰一人取り残さな

い」という理念を体現できるような動きになればいいなと思っております。どうぞよろしく
お願いいたします。

(北海道NPOサポートセンター・定森 光)

北海道NPOサポートセンターの定森と申します。私どもはNPOの中間支援組織として、NPOの立ち上げや運営のサポートをかれこれ20年行ってきた団体になります。現在会員が大体、団体で200~300程度になっておりまして、道内の様々な分野のNPOと、各地のNPOの支援センターと連携をしながら活動しております。今回、私たちがSDGsに期待するところとして、NPOの活動は単独で社会課題解決できるものではなく、行政や企業、様々な人たちとの連携が必要となってくる、ますますそれが必要だということに感じています。このSDGsが一緒に共通の目標を持つということで、そういった連携が促進されていくということ、繋がることをすごく期待をしているところです。今回の懇談会につきましては、ビジョンを策定していくということですので、この場だけに限らず、色々な人たちの声を聞けるような場になって欲しいと思います。ビジョンというのは、共に作ることで自分たちのものになっていくと思いますので、そこを蔑ろにされてしまうと、作っただけのものになるというふうに思います。ただ単にビジョンを作るだけではなく、作った後にも生かされていく、そのためのプロセスになるようにこの場になっていくといいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(北海道中小企業家同友会・清水 誓幸)

一般社団法人北海道中小企業家同友会の理事を務めております、清水と申します。また、江別市で中小企業を経営しております。私どもの中小企業家同友会の方は、北海道で約4,800社の会員がおります。4,800社、その社員も含めると、数十万、たぶん家族まで入れると数百万の人間が、この中小企業家同友会に携わっていると言っても過言ではないと思います。そして、この中小企業家同友会は、「よい会社を作ろう」、「よい経営者になりましょう」、そして「よい経営環境を作りましょう」という3つの理念を持って活動しております。このよい経営環境を作ろうというもの、イコールSDGsのゴールに繋がるのではないかなという、僕自身の思いの中で、同友会の中でこのSDGsをどうやって広めていくかということが、私の課題と思って活動しているところでございます。そして、こういう懇談会の中で企業に与えられる、また、企業がどのような皆様方から価値や期待を持たれているのかということ、よく我々は知りながら、同友会のなか、または企業のなかに知っていたきながら、大きなステークホルダーの一員として活躍していけるように導いていければなと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会の菅原と申します。私どもの財団は、札幌市内の児童会館や野外施設、若者活動支援施設などの管理・運営をしている財団になりますが、私自身は、札幌市男女共同参画センターの仕事を15年間行っております。そういった意味

では、今回お声がけいただいたのは、今回のビジョンにジェンダーの視点をしっかり入れなさいということをご期待されて参加させていただきたく思っております。ゴール5にジェンダー平等というのが入っているのですけれども、このゴール5だけではなくて、すべての17の目標に対して、ジェンダーの視点というのは欠かすことの出来ない視点だと思っております。また、今回のビジョン作成というフェーズもそうですが、ビジョンが出来上がった後の具体的に取り組むフェーズ、モニタリング、それから評価、統計に関しても、ジェンダー統計というのがまだまだ基盤が出来ていないところだと思うのですが、そういったビジョンが出来た後のあらゆるフェーズにおいてもジェンダー視点が不可欠です。そういったフェーズごとにしっかりジェンダーの視点を取り入れていくということをきちんとビジョンの中に入れていけるようにしたいと思っております。私どものセンターには、多様な女性の方が来館されますが、そういった方たちが、今回のビジョンを自分事だと思える、大切にしていきたい、こんな北海道にしていきたいと思えるような、そういったビジョンを皆さんと一緒に作っていただけたらいいなというふうに思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

みなさんこんにちは。コープさっぽろの鈴木と申します。コープさっぽろは、全道に170万人の組合員さんがいらっしゃって、世帯構成率だと50%以上、2世帯に1世帯以上がうちの組合員さんという組織で、店舗事業、宅配事業、配食事業等を行っております。昨今、SDGsという言葉、結構聞くようになりましたが、実は生協は、コープさっぽろだけではなく、1990年代、全部の生協の21世紀理念というものの中で持続可能な社会づくりというのを理念として掲げております。ですので、生協の存在自体が持続可能な社会づくり、SDGsとまさに一致しております。先ほども申し上げたように、コープさっぽろは170万人の組合員さんがいらっしゃいますので、うちの組合員さんのためにSDGsを推進することは、ひいては北海道のためにもSDGsを推進することに繋がるのかなというふうに思います。皆さんの色々な意見を通じて、うちのコープさっぽろに関するSDGsの更なる発展も考えたいと思いますし、皆さんと共に北海道のSDGsを推進したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(JICA北海道・野吾 奈穂子)

JICA北海道の野吾と申します。JICAは、国内の皆様の技術的ご支援をいただきながら、開発途上国の支援を行う政府系の独立行政法人です。環境省からJICAに転職した経歴を持つ私としては、環境問題と国際協力の双方に関心があります。JICAにはスローガンが2つありまして、1つは、JICA北海道の「国際協力で北海道を元気に」、もうひとつは「国際協力を日本の文化に」というJICA全体のものがあります。日頃から道庁様を始めとする様々な方々に国際協力の実践で非常にお世話になっていて、SDGsへの貢献、また地方創生への貢献を果たしていこうとしています。JICAはSDGsの1番から17番のゴールそれぞれについて、ポジションペーパーを作成して公開しています。もちろんJICA単体ではなし得ないことなので、これも皆様とのパートナーシップで進めていき

たいと考えております。JICA北海道としては、児童のみなさんへの国際理解教育の推進や青年海外協力隊の派遣、あるいは、道内の中小企業や大学の技術などを途上国の開発のために展開する事業を行っています。本日、北海道教育委員会主催の「帰国・外国人児童生徒等教育の推進支援事業運営協議会」に参加したところ、道内の学校教育現場で多文化共生が、今、喫緊の課題であるというお話がありました。道内で外国人との接点・交流というインバウンド・観光客が注目されがちですが、今まさにグローバル化がどんどん進んできて、現場で多くの課題も出てきているということです。なので、我々が推進している国際協力、それによって得られた知見が、また国内外の現場に還元されていくことを私自身も期待しています。JICA北海道では、SDGsをテーマにした歌を作って歌っておりまして、SDGsの普及啓発に力を入れている吉本興業とのコラボレーションで、8月8日（道民笑いの日）に歌わせていただくなど、様々なアプローチでSDGsの情報発信を行っている次第です。どうぞ引き続きよろしく願いいたします。

（酪農学園大学・吉中 厚裕）

ありがとうございました。今の話しを聞いているだけで、この懇談会は成功するというのを私は確信いたしました。では早速議事に入りたいと思いますが、お手元の次第をご覧ください。配付資料というところで、資料1から資料2、資料3-1~3、資料4と用意していただいております。みなさんお手元をめくっていただいて、全部そろっているか念のため確認していただけますか。大丈夫でしょうか。それでは、本日の予定されている議事（2）～（4）の3つが予定されております。（2）「北海道SDGs推進ビジョン（仮称）」の基本的な考え方、（3）「北海道SDGs推進ビジョン（仮称）」の内容について、（4）「北海道におけるSDGsの推進体制について」と、少し広い議題になりますが、どれも関連しているかと思しますので、もしよければ、まとめて事務局のほうからご説明いただいて、3つにまたがるようなコメントをいただければいいかなと思います。よろしいでしょうか。それでは、事務局のほうからご説明いただけますか。

（渡邊計画推進課主幹）

計画推進課SDGs推進グループの渡邊と申します。よろしくお願いいたします。座らせてご説明させていただきます。改めましてですが、国連で2015年に採択されました持続可能な目標、SDGsは持続可能な国際社会を目指そうという世界共通の目標であります。北海道におきましても、人口がどんどん減少してしまっている状況ですとか、未曾有の災害が頻発しているという状況で、地域の存亡に関わる難題に直面している状況にあります。北海道総合計画に基づいて行政の運営を行っていますが、総合計画でもこうした危機を克服するために、これからの50年、100年を見据えて、多種多様な地域資源を活用して、持続可能な地域づくりを取り組もう、と進めてきておりまして、SDGsの考えとこの辺は一致するものかなという認識をしております。今年、北海道命名150年という節目の年に当たりまして、今後の50年、100年を考えるうえで、道庁のみならず、道民の皆様、各市町村、道内で活躍されております企業・団体など、全ての方々が自らのこととして、SDGsに取り

組んでいただくことで、北海道全体で持続可能な地域づくりを進めていこうということで、今回、北海道全体でSDGsを進めるに当たり、皆様で共通で考えられるものとしてビジョンを作っていきたいと考えているところから、今回、皆様にお集まりいただいたところでございます。

まずは資料2「北海道SDGs推進ビジョン（仮称）」の策定について」に基づきましてご説明させていただきます。ビジョンの基本的な考え方ということで、北海道でなぜSDGsを推進しなければならないのかということを変更してここで、国連で採択された国際社会全体の目標であることや、それを受けましての国として動きですとか、北海道が命名150年の節目の年に当たって、今後の持続可能な地域づくりにSDGsの推進がとて重要になってくるというようなことをまとめまして、SDGs推進の必要性というものを整理しました。次にSDGsの推進にあたりましては、広くステークホルダーの、道内で色々な方々の連携した取組が必要で、そのためには、道民の皆様へのSDGsに対する理解が広がって、主流化と書いていますけれども、自らのこととして、日々の生活の中でSDGsを念頭に置いた行動をさせていただくことと、色々な方々が連携・協働して取組が進み、そのためには共通の考え方が必要ということで、共通の考え方としてビジョンを策定する必要があるだろうというふうに考えております。そのような流れになってまいりますので、ビジョンの位置付けとしましては、本道において、SDGsの推進するため、道内の多様なステークホルダーと道がお互いに共有する「基本的な指針」であり、皆様が取り組む場合の、具体的な内容などを分かりやすく説明して連携・協働した取組を促進して、持続可能な地域づくりを進めるための「ガイドライン」として位置付けていきたいというふうに考えております。目標年につきましては、国連の2030アジェンダ、SDGsの元になるアジェンダの目標年になりますが、2030年を置いております。イメージですが、下の真ん中にポンチ絵で記載していますが、皆さんと共有する「基本的な指針」としての推進ビジョンに基づきまして、それぞれ皆さんが私の事として、日々の主流な考え方として、それをおいていただくと。道庁におきましては、最初の局長の挨拶でもございましたが、知事を本部長とする推進本部というのを設置してございまして、道の行政や、総合計画という大きな計画の下に色々な分野別の計画を立てて行政執行をしていますが、それら全てにSDGsの考え方を反映していく、計画の改定ですとか、新たに策定するときには、SDGsを念頭において計画を策定し行政運営をしていく、という取組を考えております。また、広範で多様なステークホルダーと書いておりますけれども、企業や団体、道民の皆様、市町村、教育機関等々、色々な方々にも、共通的な考え方であるビジョンに基づきまして、企業であれば企業の活動ですとか、道民の皆さんであれば消費や市民活動、また、もし会社に所属されている方であれば、会社の中での発言等でもですね、SDGsを念頭において行動をしていただければなというふうに考えております。こうした官民一体となったSDGsの推進によりまして、道民生活の質の向上や地方創生の推進、また、北海道全体の価値ということで、世界に対してもですね、北海道のブランドの向上ですとか、また、ビジネスの機会の拡大など、北海道全体の地位の向上、生活の向上などに期待されるというふうに考えています。

ビジョンの構成については左下の方にあるんですけども、基本的に今説明した内容をま

とめたもの、ビジョン基本的な考え方というのをまとめております。その次に、対策するためには、現状と課題の認識が必要ですので、北海道の色々な計画等でもっている数値などをまとめまして、現状と課題ですとか、後は北海道として、他に誇りうる価値とか強みを現状と課題として整理しまして、その現状の課題から皆さんが共通としてもてるような、めざす姿ですとか、現状と課題から導き出されるであろう優先課題というのを整理いたしました。その優先課題ごとにですね、わかりやすく活動していただけるようにということで、対応方向ですとか、対応方向ごとに取組イメージみたいなのが書けていけたらなというふうに考えております。ビジョンを策定しただけではなくて、推進しなければなりませんので、4としましてビジョンの推進という項目をたてまして、各ステークホルダーにこのような取組が期待されるのではないかなというようなことをまとめたりですとか、後は推進手法、推進管理、こういったものを整理したいと。この辺につきましては次の資料3-1に方でまた詳しく説明させていただきます。策定スケジュールにつきましては、この後説明させていただきます資料3-1の骨子になりますが、これをまとめまして、皆様から色々御意見などを伺いながら、9月に原案という形で整理いたしまして、10月頃にパブリックコメントや市町村等への個別照会をいたします。その後また、懇談会を開催させていただきたいと思っておりますが、その後に案を策定し、12月の年内を目処に、ビジョンを決定したいと考えております。

続きまして、資料3-1「北海道SDGs推進ビジョン（仮称）」骨子（備考入り）を皆様にお配りしていますが、左に骨子を記載しまして、右の備考欄には、骨子作成の考え方などの補足説明を追加させていただいております。策定の考え方につきましては、この辺のみなさんはおわかりの方が多いかと思っておりますが、先ほどから何度も説明しておりますが、国連で採択された国際社会全体の目標であって、地方で取り組むことも重要だと国の方でも位置付けていることすとか、北海道が今年、命名150年の節目の年に当たって、今後の持続可能な地域づくりを進めていくために、このSDGsの推進が必要だということすとか、また、SDGsの推進には自治体、企業・団体、NPO、道民など広範なステークホルダーが各々の立場で主体的に取り組むことが必要ですとか、連携して取組を進めることが必要だと。後、このため、SDGsの理念や意義について道民の皆様理解が広まってですね、道内における活動が積極的に推進されるようにこのビジョンを作るというようなことをまとめていきたいというふうに考えてきております。「ビジョンの位置付け」については先ほどご説明しましたとおりで、共通の考え方や基本的な指針であり、皆様にとってのガイドラインとなるようなものとして位置付けていきたいと考えてきております。「目標年」につきましても、2030年、国連の「持続可能な開発のためのアジェンダ」の目標年を置いております。次の「北海道を取り巻く状況」ということで、SDGsの推進におきまして、ステークホルダーに、現在、北海道はこんな状況にあるということをご共有することから始まると思っておりますので、北海道の現状・課題をSDGsのゴールに照らしながらデータを整理して行きたいと考えております。この辺の細かい資料につきましては、別でお配りしている資料3-2に、SDGsの17ゴール、その下のさらに細かい目標としてターゲットが169を記載しています。2030アジェンダでは、ターゲットまででしたが、策定後の進捗管理のためには指標が必要だろうということで、グローバルインディケーターと書いていますけれども、国連

と専門家の方で、SDGs指標というものを提案されておりまして、これが232ほどあります。ただ、このグローバルインディケーターというものは、国際社会全体のものを指しておりますので、ゴールとターゲットそのものにも言えることですが、中々、日本、もつといえれば北海道にも直接当たるものと当たらないものがあります。また、指標で示されていても、実際にそれが数字でないものもございまして、232のうち、3分の1ほどこの国も持っていないような数字、どういう数字を出すかとか概念が決まっていなくて、残りの3分の1も、概念は決まっているんだけど、持っていない国も結構多いと思います。ほとんどの国が持っているであろう3分の1でおきまして、国レベルでは持っていて、自治体レベルでは持っていないというのが多いのが現状です。そのため、その次に、自治体SDGs指標検討委員会というところが、日本国内でこういう指標を使ったらどうかと提案しているローカライズ指標というものがございまして、そうしたものを整理したものでございまして。後は、北海道が色々な行政運営において必要な計画の中で指標を設定しているのがありまして、こうした①～③までに関連するものに、道が持っている計画の数字の中で近いと思われるものをこの表で取りまとめております。こうしたものから現状や課題というものを整理しています。また、この次の北海道の価値や強みということで、色々な考え方があると思うのですが、北海道では、雪とか寒さとか、最近はインバウンド等で雪の観光も大分強くなってまいりましたし、やっかいものの雪ですけれども、貯蔵すると夏の間の冷房として省エネになるなど、色々な捉え方ができる。そういった北海道のもつ優位性と考えられるものを積極的に活かしていくものということで、可能な限りこれもデータ化して皆様にお示ししていきたいと考えております。次のページに移りまして、「北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」ですが、事務局の方でここまでまとめているところですが、この辺の表現だけとか、考え方とかについても、後でみなさんに忌憚のない御意見をいただければと思っておりますが、めざす姿というのは、SDGsの推進によって、世界の中で北海道の存在感を高めながら、将来にわたって安心して心豊かに住み続けることができる地域社会を形成していくという思いを込めまして、北海道の総合計画のめざす姿にSDGsの要素を組み込んで、事務方として、「世界の中で輝きつづける北海道」というフレーズでどうかなと考えているところでございます。北海道の優先課題と対応方向については、SDGsが示す幅広いゴールや国の優先課題を踏まえながら、先ほど、これからまとめると説明をしましたが、「北海道を取り巻く状況」との関連性を測って整理していきたいと考えております。これについて、資料3-3を見ていただきたいのですが、これもSDGsのゴールですとか、国の方で8つ程優先課題とかを設定しておりまして、事務方で想定している現状・課題や価値・強みのデータとの関連性を整理しまして、優先課題として、大体5項目くらいを、こちらの方で書いているもので取りまとめていけないのではないかと考えて、お示ししているところでございます。優先課題ごとにですね、それぞれの対応方向ですとか、その対応方向を具体的に示す優良事例みたいなものを、皆さんに御意見を伺いながら、まとめていければいいなと考えております。その次の、「4 ビジョンの推進」ですが、各ステークホルダーの皆様、このようなことが行われることをとか期待されるのではないかと書いていけたらいいなと考えております。今ここで、行政、企業、団体・NPO、教育機関、道民という区分で組み合わせていますが、

これは国の実施指針においてこういった区分で載せておりましたので、それにならってとりあえず置いているものでございます。ステークホルダーの分けの捉え方にございまして、色々な御意見があると思っておりますので、これについても皆様から御意見いただければと思っております。そして推進手法、具体的にどのように推進するかということですが、道については、最初の方でもご説明いたしました、知事を本部長とする全庁横断的な推進本部というものを設置しておりますので、その本部のもとで、各部、総合的出先機関であります振興局が一体となってSDGs推進に向けた取組を展開するとともに、政策や事業の実施、各種計画の改定等にあたりましては、SDGsの要素を反映して、全庁の取組を全てのSDGsを念頭において進めていきたいと考えております。ステークホルダーの皆様には、ビジョンを共有していただき、優先課題の解決に向けた、連携・協働した取組を推進していただきたい。道民の理解の促進やステークホルダーの活動を促すため、先行して取り組むステークホルダーと連携しながら、幅広い世代に向けた普及啓発をしていきたいということで、骨子の中ではまだ書いていませんが、今後、進めて行く中で、横の繋がりとしてネットワーク組織というものを立ち上げていきたいと考えております。原案の段階では、この辺も盛り込んだ形で書いていきたいと考えております。推進管理につきましては、道内におけるSDGsの先進的な取組状況について、ステークホルダー等の意見交換などを通じて把握し、広く情報発信を図るとともに、また、道の主な取組につきましては、政策評価、道の政策は全てそこで評価を行っていますので、こうした結果を踏まえて公表していきたいと考えております。ステークホルダーと意見交換などとありますが、先ほどご説明したネットワーク組織を通じて積極的に取り組んでいきたいと考えております。もちろん、ビジョンは作って終わりではなく、社会情勢の変化や、推進に関する情報などを踏まえまして、必要に応じて見直していきたいと、明記したいと考えております。

続きまして資料4「北海道におけるSDGsの推進体制について」を説明させていただきたいと思っております。お集まりいただいている皆様は、SDGsに積極的に取り組まれている方で、皆様からお話を伺う限りでは、周りでどんどん照会の電話がかかってくるとか、どういふことをやったらいいんですか、という相談もくるとかいう話しも多く聞くんですが、やはり一方で、まだ道内全体を見回した中では、中々普及も進んでいないところだと思います。また、企業や団体の中で、SDGsに取り組もうと思われた方の中にも、具体的に何をやったらいいんだとか、誰かと手を組んで一緒にやるべと思うけれども、SDGsに取り組んでいる人はどこにいるんだ、といった照会はずいぶんうちの課にも寄せられておまして、こうした中で、やはり横の繋がりを広げていくことが重要ではないかということで、ネットワーク組織というものが必要と考えております。目的としましては、道内の各ステークホルダーへのSDGsの浸透を促すとともに、ステークホルダー間の連携を構築するなど、取組の裾野の拡大を目的としております。この辺につきましては、RCE北海道道央圏協議会の方でも、道央圏におけるネットワーク組織が出来上がっておりますので、これを基に北海道全域に広げていくということが、まずは一番効果的なのかなということで、RCE道央圏協議会の協力も得ながら、協働で事務局の形を作らせていただいて、お集まりいただいている皆様にも、設立時のメンバーに入っていただくような形でネットワークを広げていければと考えており

ます。取組の内容につきましては、誰がどういうことをやっているのかということをお互いに共有することがまず重要かなと思いますので、まず名簿を作って、もちろん情報についてはみなさんにできた範囲でのものになりますけれども、そういうことに取り組まれている方、そしてどうやって取り組まれているかということの情報共有ですとか、または、みなさんはすごい積極的に活動されていますので、イベントでしたり、共演者募集でしたり、そういったものを、事務方から登録していただいた皆様に配信するようなところからスタートして、ゆくゆくは、皆様の活動を報告するような場になるよう繋げていきたいと考えております。ネットワークにつきましては、今回、皆様から御意見をいただきまして、少し拙速ではありますが、なんとか8月末までには立ち上げて、動きながらどんどん膨らませていくような形で進めていきたい。この辺りはRCE道央圏協議会のご都合もあると思いますが。なるべく機運が高まっているところで、なるべく逃さずに立ち上げというところからスタートして、最初のうちは小さいところからかもしれませんけども、どんどん膨らませていきたいというふうに考えております。事務方からは以上です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。詳細にご説明いただきました。まず資料2の策定では、ビジョン作成のプロセス、タイムスケジュール、背景などをご説明いただいて、資料3-1では、6月に策定された骨子案の概要やさらになぜこういう文言を書いてきたかというようなご説明をいただいたかと思います。そして資料3-3では、空欄があるとおり、ここあたりのこれから埋めていく作業があるのかなと思いますが、骨子案の中で提案されている、優先課題ごとの対応方向を意見交換したいということだと思います。この後、ざっくばらんな意見交換というのをさせていただければと思いますが、凄く広い範囲なので、まずは資料2あたりでご意見・ご質問等をお願いします。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

資料2についての前に、後で齟齬があると困るので、この懇談会の位置付けを確認したいのですが、この懇談会の目的はSDGsに関する意見交換を行う場と書いてあり、内容としてはビジョンの策定に向けた意見交換やSDGsの推進に関わることということで、今年度3回程度開催とされていますが、意見の扱いはどういう扱いになりますか。あるいは、もう少し言えば、ビジョンは道の行政に反映させるだけではなく、多様なステークホルダーに反映させるということが前提だと思いますが、懇談会はビジョン策定の主体なのか、参考意見を言う場なのかということを確認したい。

(石川計画推進課長)

我々だとやはり行政的な計画あるいはビジョンになる傾向がありますので、そうならないように、SDGsを実践されている方にお集まりいただいて、その意見を踏まえて一緒に作っていききたいという思いで懇談会を開催しています。ただ、最後は我々が責任持って作らざ

るを得ませんので、道庁の立場としてビジョンを作ります。どういう扱いにされるかということですが、意見を踏まえて、懇談会の中で一緒に作っていきたいという思いが強いという気持ちは理解いただければと思います。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

構えとしては、作る主体として捉えていいということでしょうか。

(石川計画推進課長)

はい。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

ついでにもう一個。先ほど定森さんもおっしゃっていたと思いますが、ビジョンは凄く重要だと思うんですね。ビジョンをベースに、色々な具体的なことに反映されていく。今回のビジョンというのは、説明にもありますが、行政の計画に反映させるだけのビジョンではなく、あらゆるステークホルダーに対応するビジョンを作りたいということだと思いますが、そうであるなら、ビジョンを作るプロセスに多様なステークホルダーが関与しないと、「これがビジョンですよ。」と言われて、「ああ、そうですか。」というものではないと思います。もちろん、道民全員というのは限界がありますが、少なくともそういう姿勢でビジョンを作る必要があるのではと思います。繰り返しになりますが、このプロセスは少し拙速過ぎる。ビジョンを作る上で、既に骨子案があって、さらに原案が9月にできてしまい、年内に策定するという中で、どこまでオープンなプロセスをできるのかという、かなり無理があるような気がします。私は懇談会のメンバーの方にも、そのオープンなプロセスを懇談会のメンバーとして作っていきましょと提案をしていますが、それをするには、もう少し丁寧なビジョン策定のプロセスが必要ではないかなと思っております。議会等の対応があると思いますが、オープンなプロセスでやるために拙速に作ることをやめていますと説明すれば、議会も納得すると思います。

(石川計画推進課長)

2015年に国際社会全体の目標として出来ているものですので、我々としては、一刻も早く北海道全体で取り組みを進める必要があるのではないかという意識の下で、このビジョン策定のスケジュール、内部でも議論はしましたが、このようなスケジュール間で作業を進めています。しかし、小泉さんがおっしゃるように、非常にプロセスが重要だと思いますので、我々もできる限り、丁寧な策定作業を進めていきたいという思いですので、この懇談会の皆様に、我々も非常に期待をしているところです。この場でも丁寧に御意見をいただきますし、それ以外の場でも、可能な限り意見交換を「する場を設けていきたい」と思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

プロセス、特に策定スケジュールのことでご意見いただいておりますが、何か他のメンバ

一からご意見はありますか。

(北海道NPOサポートセンター・定森 光)

私も小泉さんの意見と同様で、中々変え難いスケジュールだとは思いますが、道民の色々なステークホルダーと共有するビジョンというには少しスケジュールが厳し過ぎて、12月に出来上がったものが共通のものだということには、ちょっと無理があるというのが実感です。総合計画に則った形に成らざるを得ないのかもしれませんが、その総合計画自体が広く道民から意見をもらって作られているものなのかよく分かりませんが、「無いのかな」と思うと、この懇談会以外の場でも意見を聞くようにするということを言われましたが、ビジョンができた後もやっていくということと、今回作るビジョンが不十分なものであるということはしっかりと認識する必要があるのではないかと思います。もう一点、総合計画や様々な道の計画に合わせて、指標を図の方で見させていただきましたが、既存の指標と同様のものに留まるのであると、せっかく新しいビジョンを作るには、意味がないのではないかと思います。今ある計画の不十分なところを、普段活動をされていたり、様々な取組をされている人たちは把握していたり気づいていると思いますので、指標についても、多様な意見を踏まえて追加したり、見直すということも必要だろうと思っています。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ありがとうございます。そのほか、何かありますか。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

成果物として、ビジョンというものは、どれくらい具体性のあるものをイメージされているのかな、と思いました。先ほどから、スケジュールがタイトだというお話がありますが、本当にスローガンのような、みんながこんな社会になればいいと思いつかべられるような質的なものなのか、もしくは具体的な数値目標もたてるというところまでなのでしょうか。また、このビジョンが決定した後にアクションプランのようなものがあって、その中で具体的な数値目標や事業や予算が決まるのでしょうか。このビジョンができた後に、道で実際に推進されるのは推進本部や各部署になるかと思いますが、道だけではなく多様なステークホルダーの方達がこのビジョンを使って実際に活動を初めて行くというときに、ビジョンがどのように道庁の中で運用されていくか、そういったイメージがあると、成果物としてのビジョンの具体的なイメージがわかるかなと思いますので、イメージがあれば教えてください。

(石川計画推進課長)

ビジョンは道庁内だけではなく、色々な方々にビジョンを見ていただいて、SDGsはこんなものなのか、こういうことに取り組んだらいいのか、そういったイメージが沸いていただけのようなものにしたい。ですので、先ほどから申し上げますけども、オール北海道の共通の考え方を示すようなビジョン。ただ、SDGsとは何かとわかったとしても、例え

ば、具体的に道民の方々がどういう行動をとればいいのか、企業の方がどういうふうに取り組めばいいのか、一部の人は先行して既にやられていると思いますが、ビジョンに形をとっていただいて、こういう行動をすればいいのか、というのが分かるようにしていきたいというのが一つです。道庁はSDGsのビジョンを作りますので、今書こうとしている優先課題ですとか対応方向に沿った取組を道政の施策とか事業を毎年決めていきますので、そういった中に反映していく。大雑把に言うとそのような形を目指しています。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

道の推進の取組に対しては、道が評価、モニタリングをしていくし、民間の部分に関しては、民間がそれぞれ目標達成できたかモニタリングしていく。個々に行っていくということですか。

(石川計画推進課長)

これから相談しようと思っていますが、優先課題を5つ付けており、それぞれに対応方向をいくつか書こうと思っています。それは皆様の意見をいただいて書こうと思っていますが、対応方法ごとに目標値が分かりやすいような指標をつけていきたいなと思っています。そうすると、先ほどご指摘ありましたけども、例えばこういうデータで指標を作ろうとしたとき、データがとれないと指標が設定できませんので、そこも見ながら、これから調整していく必要があるかなと思っています。ただ、あくまで現状・課題で示すようなデータをもって、例えば、現状の「100」を「120」にしましょうということを書こうと思っていますので、それを何にするかというのはこれからのご相談になろうかと思います。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

優先課題ごとの長期的な数値目標というのは懇談会の中で考えていくということですか。

(石川計画推進課長)

こういうデータで設定したらいい、というようなご意見をいただいて、それを我々で一度考えさせていただいて、その数値で本当に毎年評価できるのかといったことを調整させていただいて書き加えていく。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

わかりました。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

他のメンバーの方、ご意見ございますか。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

まず名前ですが、「北海道SDGs推進ビジョン」という名前が、名前の良し悪しというよ

りも、少し整合性がとれないと思います。例えば、骨子案では「4 ビジョンの推進」というのがありますが、推進ビジョンを推進、つまり推進の堂々巡りといいますか、推進ビジョンを作り、それをまた推進する。もしかしたら推進ビジョンを推進するビジョンを作らなければいけないのかといった堂々巡り。2030年が目標年ですから、2030年までにSDGsは達成しなければいけないわけですよ。明らかに達成ビジョンの方がいいと思いますが、いかがでしょうか。

(石川計画推進課長)

これについても、内部でも凄く議論がありました。SDGsそのものはゴールなのに、ゴールを推進というのはおかしいのではといった議論は確かに内部でもしました。今おっしゃられるように、SDGsの達成に向けた取組ということだと思いますが、我々はそれをSDGsの推進と言っているところなんです。ですので、言われている意味は同じだと思いますが、表現の仕方の問題だと思います。なぜそういうふうになっているのかというと、国において、自治体がSDGsを推進するための取組コンセプトを取りまとめている、その中でSDGsの達成に向けた取組をSDGsの推進と言っていますので、それを踏襲して我々も使っている。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

こだわりがなければ、取ってしまえばいいと思いますが、「SDGsビジョン」というような。

(石川計画推進課長)

「推進」を取るとのことですか。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

はい。推進ビジョンの推進、というのは何か変ですよ。

(石川計画推進課長)

確かにそれは内部でも議論しました。ゴールなのに推進を使うのは違和感があると。少し考えてみます。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

名前は検討していただきたいと思います。

(石川計画推進課長)

皆様からも意見いただきたいと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

座長がどこまで話していいかわかりませんが、今の議論はすごく面白いと思って、推進ビ

ジョンの中にビジョンの推進という項目があるというのは、実はこのビジョンの推進というところが肝ではないかと思えます。ビジョンができた後、どのように進捗を測るのか、道庁中ではどうする、それ以外の人はどうするというようなご質問を受けましたが、資料2でいうと、真ん中のイメージのところに書かれていて、SDGs推進ビジョンが真ん中にあり、道庁では、総合計画の下にある色々な総合計画に反映させていく。そういうツールを使って、このSDGsの推進のモニタリングをしていく。さらに道庁以外の多様なステークホルダーにも、この推進ビジョンをツールとして、SDGs達成に向けた取組を折に触れて見直しながらやっていくということからすると、このビジョンの推進というところが一番の肝のような気がします。また、本当にタイトなスケジュールで大丈夫なのかとも思いますが、先ほどの説明でそうかと思ったのは、資料4の推進体制について、この「(仮称)北海道SDGs推進ネットワーク」は、実は8月に立ち上げたいということからすると、ビジョン策定と平行して推進体制が立ち上がっていくというイメージで提案されています。そうすると、ビジョン策定のところから、今の懇談会メンバーを超えた広いネットワークを立ち上げて、その方々の意見も聞いていこうということを狙っているのかなと思ってまして、そういうところが、もう少し見えるように、例えば、策定スケジュールのところに、ネットワークをどのように位置付けていくか、パブリックコメントや市町村への意見照会と10月にありますが、その前後で、このネットワークを通じた地域懇談会みたいなものやってみる、そのようなものがあると、策定のところからできるだけ多くの人の御意見もいただき、実施にも繋がっていくということがあるといいと思いましたが、この理解はあまり間違っていないですか。

(石川計画推進課長)

ネットワークについても、8月には立ち上げたいと思っていますが、現在調整中ですので、具体的にどういった形で回していくかというのは、考えなければいけないのですが、座長からもご指摘ありましたように、ネットワーク組織の中でも、当然、その段階のビジョンを提供させていただいて、色々なご意見をいただきたいと思っています。先ほど、あらゆる機会を使って意見を聞いていくとご説明しましたが、1つとして、これが入っています。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

ご説明ありがとうございます。質問ですが、資料2のビジョンの位置付けの2点目に、「ガイドライン」とありますが、先ほど石川課長もおっしゃっていたように、これを読んだ道民の人が「SDGsってこういうものだ」、「こういうふうに進めていこう」というヒント集というようなイメージになるのか、「ガイドライン」という言葉でよく分からなくなってしまった。先ほど菅原さんもおっしゃっていたように、どこまで精緻化された内容であるべきなのかというところが見えにくいと思いました。定森さんもおっしゃっていたような、不十分なものであるという前提というのは、作った時点ではベストなのだろうけれども、時間が経っていくと、どうしても陳腐化してしまうものだと思いますので、そういう意味で見直しも必要だと思いますが、「ガイドライン」という言葉になると、結構具体的なものでない

といけないのかなという印象を持ってしまいました。

(石川計画推進課長)

これについても、「ガイドライン」がいいのかという議論はしましたが、我々のイメージとして、SDGsの2030年のあるべき姿を描いて、バックキャストでどういう取組をしていくのかというのは、なんとなくイメージはわかりますが、そではなく、我々が考えているSDGsは道民の色々な人たちが色々な場面で色々な取組をしてもらいたいと思っていますので、ビジョンを見て、「こういう取組をすればいいんだな」というイメージが湧いていただけるような考えを持っています。ガイドラインがいいのかどうかという議論はあると思います。「マニュアル」など、色々考えましたが。それで、先ほどご説明させていただいた資料3-3ですが、優先課題ごとに対応方向を書いて、そこに取組の成果を測れるような指標を説明して、具体的に何をするのかというところで、道民の方はこういう取組、あるいは企業の方であればこういう取組が考えられますよ、そういうことを皆様の意見を聞きながら書いていきたいと思っています。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

ステークホルダーごとに対応方向を書いていくということですか。

(石川計画推進課長)

例えば、1の安全・安心社会で貧困対策をする必要があると対応方向に書くとする、道民の人はこういう取組がありますね、企業ではこういう取組がありますね、そんなことを書いていけないかなと思っています。ビジョンを見て、「こういう取組でいいんだ」、「SDGsをあまり深く考えなくても、こういう取組をするとSDGsに繋がっていくんだ」、そういうことがイメージできるようなものにしたい。それをなんとなくガイドラインと呼んでしまっていますが。

(JICA 北海道・野吾 奈穂子)

わかりました。ネットワークについても質問がありますが、先にビジョンの方を。

(中小企業家同友会・清水 誓幸)

自分から首を絞めるようなことを言うかもしれないかもしれませんが、資料3-1の2ページ目、ビジョンの推進の(1)の企業についてです。「中核的事業を通じたSDGs達成への貢献」と書かれていますが、「貢献」くらいではだめじゃないかなと思っています。企業には「責任」くらい与えてもいいのじゃないかと。CSRでも「貢献」ではなく「責任」ですから。「責任」という言葉に変えてもいいのではないかと思います。また、ニワトリかタマゴがわかりませんが、問題を解決していかなければ、ステークホルダーは増えない気がします。今、北海道民が抱えている課題、この辺りを明確にさせていただくこととして、それを我々も含めて道民が知らなければ、企業の皆さんも知らなければ。課題を解決していくことでステークホ

ルダーは増えていきますし、誰も取り残さないということであれば、その問題・課題に関わってしまっている方たちのことをしっかりとみることがまず大事だと思います。その辺があまり明確になっていないような気がします。例えば、資料3-3の一番上の枠の「北海道取り巻く状況」に、「年間総労働時間」が書かれていますが、これはどれくらいで、どれくらいにするといいだろうか、というものも明確になったほうがいい。その下には「就業率」があり、これも、現在どのくらいでどうなるべきか、というように明確になったほうがいいのではないかと思います。ビジョンを作ることで、目を輝かせる人もいると思いますが、逆に、「なんだこれ、僕に関係ないよ」という人が、今、あまりにも多いのかもしれない。そのために、問題・課題を解決していくということも平行してやっていく。どのステークホルダーからでも、同時並行してやっていかなければならないという、自覚や考え方が必要ではないかなと感じていて、今ここで議論されていることは、課題の中の方たちに向いていないとか、意識がない方たちを度外視してないかと感じました。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

まず一つは、ステークホルダーの考え方ということで、清水さんがおっしゃられたこと重なると思いますが、持続可能な開発ということのテーマ、目標なわけですよ。持続可能な開発という中で、SDGsでは「誰一人取り残さない」というスローガンを掲げたわけですよ。逆に言えば、これまでの開発の中で色々な人が取り残されてきたということの反省の上に立ってそうなっているわけです。ですので、一番のステークホルダーは、取り残されがちな人々だと思ふ。国連では、持続可能な開発に関わる会議の中で、9つのメジャーグループというのがあり、女性、若者・子ども、先住民族、農業従事者、労働者・労働組合、NGO、ビジネス・産業、科学者、自治体となっています。ここのステークホルダーの捉え方に姿勢がでていると思います。持続可能な開発を進めるという意味合いが。正直に言いまして、道が作った骨子などを見ても、SDGsが一番に掲げている「誰一人取り残さない」ということが感じられないわけです。そこは最重要なポイントだというのが私の意見です。また、北海道で総合計画を作ったばかりですし、総合計画の期間がかなり2030年に近いところまでですので、それと反するものを作るのは変だと思いますので、整合性を考えることが必要だと思いますが、総合計画をあまり下敷きにすぎると何のためのビジョンか分からない。例えば、区分の仕方とか、価値と強みなどは総合計画から引っ張ってきたものですよ。同じことをやっても仕方ないのではと思います。むしろ、もっと違う区分、誰かも言っていましたが、違う切り口とか視点で、SDGsと絡めて光を当てていくことのほうが、重要ではないでしょうか。下手に総合計画を下敷きにすると、発揮しにくくなると思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

段々、骨子の中身の方に入ってきていますが、何かございますか。骨子の「北海道の取り巻く状況」で、小泉さんがおっしゃっていた、「世界に誇れる北海道の価値と強み」を8つあげていただけていますが、これはどこからオーソライズされていますか。

(石川計画推進課長)

総合計画からオーソライズされています。改めて、総合計画とマッチングしてて、これを項目別ごとにSDGsの推進に貢献できるのではないかな、ということで改め確認できたので、そのまま今掲載しています。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

骨子の1番、2番なんかは、背景的な位置付けなので、ほんとに議論すべきなのは、3番、4番だと思いますが。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

「めざす姿」自体が総合計画とほぼ同じ。「世界の中で」があるかないか。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

骨子の中身のところに入ってきておりますが、何かご意見ありますか。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

骨子についてですが、2番の取り巻く状況で、総合計画から出てきていますが、せっかくSDGsのということで17ゴールが掲げられているので、北海道の現状や課題なども、①～③のようにまとめるのではなく、17ゴールごとに、資料3-2として出していただいておりますが、情報を並べ替えていただきたいです。過去にEPOでも17ゴールに基づいて、北海道の現状をデータとして出して欲しいというような意見がありましたので、時間のない中、道のホームページで調べさせていただきました。公開している情報で17ゴールごとに指標を出すことはできましたが、探す身としては大変で、何がどこにあるか、全然わからなく、大変でした。さらに指標を、経年変化で見える化されるとより良いと思っています。例えば、漁獲量の変化なども経年変化であれば良いと思います。報告によっては数字だけで出されていて、現状を経年変化で見れるような状況にならなかったのが結構見受けられました。まず、SDGsということなので、そこを是非お願いします。指標はお持ちだと思いますので、一度、現状をみるという点でも整理していただきたいと思っています。もう1つ質問ですが、3番に「北海道のめざす姿」とありますが、「輝きつづける北海道」というのは、具体的に「輝きつづける」とはどういうイメージでしょうか。私が思うには、「輝きつづける」とはずっと頑張り続けるというようなイメージがあり、少し疲れるイメージ。磨き続けなければいけない、走り続けるとかそういった感じがしますが、具体的にどのようなイメージで、この言葉を選ばれたかをお聞きしたいと思っています。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

1点目の質問は、資料3-2のようなイメージのものではなくて。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

今、道の方で色んな指標をお持ちだと思いますが、ゴール1でしたら貧困の関係なので、子どもの貧困率などそういった指標があれば、それを経年変化のグラフにして、経まとめで見れるようにして欲しいと思っています。時間軸を置いて現状が分かるようになるといい。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

モニタリングした時点の数値だけではなくて、トレンドをしっかり追っていくということですね。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

そうですね。数値はお持ちだと思うので、後はグラフを作るだけかなと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

まだ空欄のともありますので、これから考えていかないといけないですね。2点目については、何かありますか。

(石川計画推進課長)

総合計画の「めざす姿」は「輝きつづける北海道」にしていますが、それは課題を解決し北海道の価値とか強みを活かして、今輝いているものはさらに輝くよう、安全・安心な地域社会を形成していこうというイメージです。将来にわたって、安全・安心に暮らせる地域社会を形成していこうということを「輝きつづける北海道」としています。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

安全・安心な暮らしが「輝く北海道」ということですか。

(石川計画推進課長)

正確に言うと、将来にわたって安全で安心して心豊かに住み続けることができる活力ある地域社会の形成、これを「輝きつづける北海道」として目指していきましょうとしています。そこでSDGsの世界共通目標という視点を加えるので、「世界の中で輝きつづける北海道」という思いを込めて、仮ですけども、骨子の段階ではそういうふうにつけています。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

これはビジョンなので、ビジョンの中で1番の中心がこの「めざす姿」ということだと思います。なので、骨子案として「めざす姿」があるのは、何もないとイメージがつかないのでわからなくはないですが、元に戻りますけど、これは多様なステークホルダーにとってのビジョンであるためには、ここはすごく議論が必要だと思います。ですので、あまりこれを前提にしないで考えられるようにしてほしいというのが私の要望。総合計画の「めざす姿」だから取り入れたいというのは分かりますが、正直、具体的なイメージが湧かない。例えば、

一文でも「誰一人取り残さない」というのは、キャッチフレーズでもあるけれども、向かう方向性が明確に表現されていると思います。けれど、「輝きつづける北海道」はなんだかよくわからないというか、何をもって輝くとするのかは人によっても違うと思いますし。外に向けて北海道をアピールするというイメージを全体的に感じますが、どちらかと言うと、先ほど清水さんも言われていましたが、中を向くと言いますか、北海道に住んでいる一人一人がきちんと幸せに生きていけるということが、SDGsを参照とした目標になると思います。どう表現するかは別にして、そういう視点をもっと出せないと、推進していきたいという意欲が湧かないというのが正直なところです。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

「世界の中で輝きつづける北海道」と括弧書きで書いてあるのは、キャッチフレーズ、キャッチコピーみたいなことだと思いますが、その下に3行で説明していただいている、さらに資料2の方では、「道民生活の質の向上」、「地方創生の推進」、「北海道ブランドの向上」、「ビジネス機会の拡大」、まさに北海道の中で北海道の人たちの生活を持続可能でさらに発展していこうというようなことが書かれていますので、ここからいきなり「世界の中で」というキャッチフレーズになるのかという疑問もあるかもしれませんね。私は逆にこれを見たときに、「世界の中で輝きつづける北海道」とい打ち出すなら、どうして国際協力の推進や地方自治体レベルでの海外貢献みたいなものが出てこないのかなと思い、見ていたところ。もしキャッチフレーズを、凄く上手なコピーライターみたいな人がいて、全体ができた時につけていただけると一番響くものが出来上がっていくのかもしれないですが。下の3行については、ご意見ございますか。骨子の3の(1)の「めざす姿」の下に「世界に誇れる北海道の魅力を磨き、育て、様々な強みを活かし、SDGsを推進することによって、「世界の中の北海道」としての存在感を高めながら、将来にわたって安心して心豊かに住み続けることができる地域社会を形成をしていく」とあります。小泉さんがおっしゃったように、誰も取り残さないというのが少し薄いという気がします。そのほか、何かご意見ありますか。キャッチフレーズはちょっと置いといて、説明している文面で何かご意見をいただければ。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

上手くまとめられていませんが、そもそもSDGsは誰のためのものかといった時に、ここにいる我々のためではなくて、子どもや孫達が安全・安心に暮らしていける北海道のために、今の我々のライフスタイルはこのままでいいんですかというところがSDGsだと思います。そういったことを考えると、子どもや孫が北海道で暮らしていくためには経済力もないといけないということで、道庁さんも考えられて「世界の中で輝きつづける」とつけられて、少し誤解されたのかなと思います。あくまで大事なのは、皆さんの一番可愛いお子さんやお孫さんが二十歳になるのは何年かと考え時、もうとっくに2030年超えてしまっている。もう近々の課題。少し戻りますが、スケジュールを皆さんタイトだと言っていますが、2030年まで後12年ちょっとしかありませんので、オープンディスカッションをだらだらやっても間に合いません。ここは「えいっ」とやってしまわないと駄目です。その中で、

道庁さんの総合計画というのは、これはこれで将来のことを考えられて作られているものなので、別にSDGsに沿ったものだと私は考えます。ただ、道庁さん以外の人も含めたSDGsだとなると、少し分かりづらくなってしまふかなというところです。もっと幅広くやるなら、子どもの副読本でSDGsがありますが、それぞれのゴールごとに何ができるかというようなどころまで落とし込んで考えていますよね。やはりそういうところにならないとみんなのSDGsにはならない。私はこの骨子のところを否定するつもりはなくて、それはそれでいいと思います。道としてはSDGsこうですよ。では多様な意見を組んで何かKPIを作る必要性があるのかというところですよね。それについては個別のゴールでは作れないですけども、やはり北海道全体として何十年後かを考えた時に、「今みたいにきれいな水を飲めますか」、「きれいな空気の環境で住めますか」、「仕事ありますか」、「そういった環境を維持するためにどういったKPIを設定しましょうか」ということを議論すればいいのかなと思います。

(北海道NPOサポートセンター・定森 光)

今の意見に対して、子どもや孫の将来のことを考えるという視点が大事だというのは本当にそうだなと思いました。加えて、既に色々困っている、大変な状況にいる人たちもいるので、そういった人たちのことも、小泉さんが言われるように、置いてけぼりにしないというところも重要だと思います。やはり、「誰に」というところが見えにくいというのが、「めざす姿」とまで言えるのかなと私としては思いました。また、進め方について言われていたことで、中々、多様な意見を聞くと時間かかってしまうということはわかる反面、やはりどこかで聞いていくという姿勢も重要だと私としては思っています。ただ、他の手法、例えば、副読本などで伝えていくというのは、推進という意味では色々な形でのやり方をしていると、これはどうしても道庁の推進だと切り分けなければいけないというのは、先ほどの鈴木さんのご意見だったと思いますが、そこは私も同意見ですので、これで作って、またその外でどういうふう意見を見たり、意見を伝えていくかということが重要だなと思います。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

ビジョンについてですが、RCEでもビジョンを掲げていて、それを作るのに実は2年かかりました。一つの単語の意味から凄く議論して、一番わかりやすいところで、「開拓」という言葉が最初入っていましたが、それは誰目線かというところで、アイヌの人からしてみれば、「開拓」の意味が「未開の地を拓く」という意味なので、北海道は未開の地ではなく、既に先住民族であるアイヌの人たちが住んでいたという視点から立てば、「開拓ではない」という議論を丁寧にやった結果、2年かかってしまいました。やはり小泉さんがおっしゃっているように、めざす姿というのは、みんなが納得できるというか、わくわくするような表現であるべきかと思います。スケジュールは確かにタイトで大変だとは思いますが、仮に変えられないとした場合に、今回のビジョンというのはあくまで仮のものであって、状況は変化するもので、それに合わせて変えていく。最初は小さく初めていくと先ほど渡邊さんもおっしゃっていて、そういうもので良いとは思いますが、広げていくということは様々な意見が入

っていくということになりますので、それはやはり変わっていくものだと思います。ステークホルダーが変われば「めざす姿」も変わってくると思いますので、それに対応できるということをビジョンにいていただきたいと思います。これで決まりではないと。時間や環境の変化に対応していくということ。やはり未来だけではないと思います。今、大変な人がいるというのはまさに、今の積み重ね、連続性の上に未来があるので、今の問題を解決しなければ、先もないと思います。もちろん、今は過去からの積み重ねでできているので、過去も振り返らなければいけません。RCEのビジョンは「北海道の歴史と開発を踏まえ」と言っていますが、昔のことから学ぶことはたくさんありますし、それで今があるので、前のことも大切にしたい。今の北海道の動きとして、SDGsの未来都市に選ばれた29の自治体のうち、都道府県は4つ。北海道と神奈川と長野と広島。この4つのひとつということは、非常に注目されていると思います。その中で、今ここで出すものというのは、みんなが見ると思います。道民だけではなく、日本全国の人、あるいは世界の人にも見ていただけるものになると思います。それに対応できるくらいの「北海道のやる気」みたいなのをしっかり反映できればと思っています。骨子の中にある「ビジョンの基本的な考え方」のところに、「ステークホルダー間の連携した取組を進めることが不可欠」と書いていただいていますけれども、それをするためにはどうしたらいいのかということの本気で考えていきたいと思っています。小泉さんが先ほどから何回も言っているように、国連のメジャーグループの人たちの位置付けですとか、SDGsを作るに当たってはさらにその他のステークホルダーということで、高齢者、障がい者、ボランティア団体など、さらにステークホルダーを増やしています。それが必要だという流れなんだと思います。そういうことを考えると、ビジョンの中の「各ステークホルダーの取組」で挙げられているようなステークホルダーだけではない、もっと多様な人たちを明記すべきなのではないかなと思います。具体的に推進方法についてはどうするのかもできれば入れていただきたいですし、先ほど大崎さんからもあった指標の話ですが、挙げられているのは、道庁の中の施策に対応しているだけ。色々な団体が指標を出していると思います。例えば、国際NGOが出しているものもありますし、そういった指標もみていただきたい。例えば、RCEの酪農学園大学で、ゴール15だけに注目をして、「陸域の生物多様性の保全」ですけど、そこに国の国立公園のエリアと道庁が指定している自然保護区とか、コンサベーション・インターナショナルという国際NGOが出している重要なエリア、北海道も出ていますが、それを合わせてギャップをみたりするマップを作ったりしています。行政の施策の基準だけではなく、色々参考になるものが落ちていていると思います。ここにいらっしゃる方とか、専門家の方、どういう指標がいいのかと研究している人もいらっしゃると思いますので、そういった方の知恵をお借りしたいと思います。議論の進め方も、どうやったら多様なステークホルダーが参画をしながら社会の意思決定をできるかという手法について研究されている方もいらっしゃるの、そういったところも是非活用できるといいのかなと。他にもたくさん専門家の方がいますので、なるべくそこは開いて知恵を借りながらやっていければいいのかなと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

具体的にどのような専門家の意見を聞いて欲しいとか、この人にも入ってきてもらいたいというようなものがありましたら、是非出していただいて、参考していただければと思います。今、ステークホルダーの分け方として5つに大きく分けていただけていますが、もっと細かな分けの方がいいのではというような意見も出ています。国連の分け方を参考にすべきではないかという意見もございましたが、そのあたりは何かご意見ございますか。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

SDGsを普及するにあたっては、ハードルを上げない方がいいと思います。普段、普通に行っている活動がそのままSDGsに繋がらう、大体が繋がっているという認識すらないのが現状です。ですので、そういった視点で改めて自分たちの活動というのを見直した場合に、「もう少しこういうことができる」というように意識を変えることが大事かと思います。そのためには、細かく「SDGsはこうだ」と小難しい話しにしまうと、最初から「わー」という感じになってしまう。別に難しいことではなく、普段の活動の中でできることだということを知らしめることが重要。北海道に住んでいる子どもなどが、SDGsとは何かという話を普通に話せるとか、そういうことで全然いいと思います。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

今のことに関連して、おっしゃっていることはよくわかりますが、あまり矛盾しないと思います。ステークホルダーを無理に細分化したいという話しではなく、先ほどの国連のメジャーグループでいえば、子ども自体がステークホルダーです。そうすると、子どもにとっても人ごとではない、ある意味近くなるわけです。女性というのがステークホルダーとして位置付けられていれば、女性団体がSDGsを特段意識していなくても、自分達のことと関係あるんだというふうに、よりSDGsが近づく。それはあまり矛盾しないと思います。しかし、一般的にNGOといっても広いですし、団体と言ったらなんでも入ってしまいますよね。それよりは具体的に、SDGsというか、アジェンダで繰り返し言われている脆弱な立場に置かれている人達、それは誰なのかということが一番重要だと思います。それは子どもであったり、先住民族であったり、女性であったり、外国人であったり。もちろんそれだけではないですが。そこを取り残さないことで、結果的に、みんなを取り残さないということに繋がるというのがある種のスタンスとしてあると思います。持続可能な開発ということを出して行く中に。そこは国内や地域で広げる時に意識するべきだと思います。

(北海道中小企業家同友会・清水 誓幸)

私も小泉さんと同じで、企業という一括りで書かれていますが、企業といっても、投資する側、経営する側、働いている側がいますよね。それぞれステークホルダーとしての考え方はまったく違うと思います。これを切り分けるという意味ではなく、切り分けて考えなければならぬ。ちゃんとそっちの目線、そっちの目線と切り分けて考えなければならぬということは確実にあると思います。企業という一行だと広すぎる。また、企業の中でも色々な役割の企業、事業体があり、これもまた考える視点が全然違うということ。そういう

のもあると思いますので、それを無理して分けるわけではなく、色んな視点から考えていくその目線というのがないとまとまっていけない。また、色んな人達がステークホルダーにあるということには中々ならないだろうなと感じたところです。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

私もステークホルダーを明記するということには賛成で、本当に私たちは、そういったことを特別に書かなければ必ず忘れると思います。そういった方達の意見を聞くということ私達が忘れないためにも、絶対に入れていくべきだと思います。もし仮にSDGsの達成に向けた取組が全体の数としては進んでいたかもしれないけれども、例えば、男性だけが享受していて、女性が享受していないとか、障がいを持っている方達は全然享受していないとか、ある特定のステークホルダーには影響が与えられていないということがよくあります。その視点を私達は忘れてしまいがちだと思います。ですので、あえて書いていく必要があるなと思います。また、国連のメジャーグループもありますが、北海道で取り残してしまいがちな人達は誰なのかというところも今一度、考えるきっかけになるのかなと思いました。

(JICA北海道・野吾 奈穂子)

今の鈴木さんのご発言から始まり、皆さんの意見をお聞きしていましたが、国際協力やSDGsそのものの広報というところに関わって思うこととしては、発信してすぐに響く人は割と決まっているように思います。できれば国際協力に参加していただきたいと思い、色々発信していくのですが、必ず参加する人と、絶対海外なんか行かないという人と、中間層の人がいます。それぞれに対するアプローチの仕方は違うと思いますが、凄くアレルギーを持っている人でなければ、中間層の人にも、本当に簡単なことでいいから、一歩踏み出して、アクションを起こしていただきたいとJICAとしては思っているところです。先ほど鈴木さんがおっしゃっていた、普段の活動の中でもSDGsに貢献しているということは実はあると思います。難しいことではない。しかし、先ほど皆さんもおっしゃっておられた、特別に書いておかないと忘れられてしまう存在などもあると思います。そのバランスはすごく大事なのかなという気がしました。ですので、このビジョンを読んでほしい人に、何を届けたいか、伝えたいかという、ビジョンのビジョンというか、そういったイメージがすごく大事で、例えば、「めざす姿」を書いていただいています。これを読んで主体が誰なのか。やはり道庁さんが発信するものとなると、道庁さんがやってくれるものという印象をどうしても持ってしまうがちななと思います。そこを「いえいえ、これは皆さん方も含めた自分事なんですよ」ということを感じていただくための書きぶりも必要だと思います。これを決めていく上でのプロセス、意見聴取のプロセスの問題もあると思うのですが、一見すると、道政の方針かなという印象を持ってしまいました。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

難しいですよ。道庁さんの立場だと、道はこういう数値設定しますというのは責任を持ってできると思いますが、では、民間の方にこうして欲しいというのは中々言えないと思

ますし、それはまたおかしな話で、民間側が自分達で考えて、「我が社はこうします」とか「うちの団体はこうします」とか、自発的にボトムアップされていくのが本来のSDGsだと思います。

(JICA北海道・野吾 奈穂子)

パートナーシップというところで、道庁様だけでなく、様々なアクターが取り組んでいわけですね。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

なので、いつまでにどの段階までをやるのか、というのは中々難しいですね。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

今のお話に少し絡んで、言葉使いのことで、細かいところも気になってしまっています。例えば、「官民一体になった」とありますが、これに違和感があります。まず、道の人が自らを「官」と規定しないでほしいというのが一つ。また、一体となるというよりは、それぞれ立場性などが違うわけですよ。連携と言うのかわかりませんが、協力しながらやって行きましようというイメージ。4文字でまとめるとこうになってしまうのかもしれませんが、ちょっとした言葉使いに、私なんかは違和感を覚えます。また、地方創生の推進というのも、別に国が言うのはいいですが、北海道が自ら地方創生とかいう必要はないような気がします。自分達の地域なんだから。地方と中央とかあまり関係ないですよ。そういうことも含めて、言葉使いの中に、誰に向いているのかということが結構現れてくると思います。

(JICA北海道・野吾 奈穂子)

最近ですと、例えば、金融なども入ってくると思います。

(石川計画推進課長)

そうですね。おっしゃるように、安易に「官民一体」や「地方創生」と使っているかもしれないです。なるべく地方と中央の関係にならないようにとは思いますが、少し安易に使っていたかもしれません。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

ビジョンができた後にみんなでやっていく。それぞれのセクター、それぞれのアクターの人が何をやっていくかというのがわかりやすいように、できるだけきめ細かに、何をすることが望まれている、責任がある、そういったことがわかっていく方がいいなと思いました。もう一つは、国連の分け方、あるいは国がやっているような分け方が色々あると思いますが、やはり北海道ならではの強み・特徴をどう活かしていくかという観点での分け方なども検討していただくといいのではないのかなと思います。例えば、典型的なのかというと、農業従事者というのが国連では入っています。北海道で農業は外せないかなと。あるいはアイヌだと

か。先住民というのも国連では入っています。国連で入っているものを全部入れる必要はまったくないと思いますが。北海道の強み・弱みを認識した上で、どういう分け方、考え方で推進していくかというのを、実際に書いてみるということを少し検討していただくというのではないかと思います。大分時間も来てますが、ほかに何かありますか。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

ステークホルダーを少し広げていこうという話しになっていて、先ほど有坂さんが言っていた、ステークホルダーが変われば、色々な意見がでてきて、「めざす姿」も変わってくるだろうという考えは凄く賛成です。ビジョンというのは、不十分であり、今、決めるものではない。状況とか世界の動きというのは非常に早く変わっていくので、それに合わせて早く対応ができるものにする。まさに挑戦だと思います。難しいことだとは思いますが、せっかくの機会なので、柔軟すぎるのはどうかという議論あるかと思いますが、柔軟に「めざす姿」を皆さんで決めていく、アメーバのようにステークホルダーを少しずつ決めていく。そうしたことを目指して一緒にできるとわくわくします。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

例えば、「北海道のめざす姿と優先課題・対応方向」の(2)で、骨子では5つの優先課題を出していただいている、それぞれに取組の対応方向が付いているようですが、これについて今まで何のご意見も出ていませんが、コメント等ありますか。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

資料3-3について、単純な質問ですが、ビジョンの優先課題というのがあり、それに対応するのが左側のデータで整理をした、という見方をすればいいですか。

(石川計画推進課長)

資料3-3については、ビジョンに優先課題を設定しましたので、それに対して、ステークホルダーの方が具体的にどういう対応、取組をすればいいのかというようなことを、皆さんのご意見をいただきながら書いていきたいと思っています。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

それが右側のところですか。

(石川計画推進課長)

その2つの空欄です。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

左側は現状のデータや国の方針整理したということですか。

(石川計画推進課長)

それをくり直して、5つ優先課題を設定しています。

(北海道環境パートナーシップオフィス・大崎 美佳)

この空欄をこれから埋めていきたいということですね。

(石川計画推進課長)

そうです。原案になるまでの間で埋めていきたいと思っておりますが、そこをしっかりと説明していなかったですね。我々も具体的な取組イメージというのは、ある程度は持っていますが、皆さんもそれぞれの立場で取り組まれていますので、そうした部分も教えていただきながら書いていければと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

真ん中の一番大きなコラム、「ビジョンの「2 北海道を取り巻く状況」で掲載が想定されているデータ」には、骨子の(2)に記載されている5つの優先課題が上から順番に並んでいて、それに対応すると想定されるデータが出ています。左に行くと、該当する国が設定優先課題、さらに左に行くと、該当する地球レベルのSDGsのゴールを記載しているということですね。真ん中の大きなコラムから始まり、左にいたり、右にいたりするイメージですね。まず、我々に期待されているのは、右側にいく際に、どんなことが既にもう起こっているのか、どんな取組が進んでいるのか、あるいはどういう方向でそれを進めていけばいいのか、足りないところは何かなど、そういうところのご意見を期待されているのではないかなと思います。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

優先課題は、既定路線ですか。

(石川計画推進課長)

北海道にはこういう課題の方がもっと重要ではないのかというようなご意見をいただければ、それを踏まえて検討することには当然ですが、我々が骨子段階で考えている優先課題は、現状課題を、あるいはSDGsのゴールを踏まえれば、この5つではないかと提案をさせていただきます。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

案ということですね

(石川計画推進課長)

はい。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

あまり賛同を得られるかわかりませんが、個人的には、「持続可能な」という形容詞と「経済成長」という言葉は繋げるべきではないと思っています。「持続可能な開発」というのが、ある種、誤解を招く一つの要因なのかなと思っています。もちろんSDGsにも「経済成長」が入っていますけれども、少なくとも、所謂先進国と言われる国でこれから無理矢理経済成長していくというスタンスは、あまり「持続可能な開発」に合わないと思っています。普通に捉えれば、持続可能な経済成長というのは、「どんどん経済成長していきましょう」というふうに受け取られます。それが私達のゴールなのかなと思いますので、あまりこの単語は取り入れて欲しくない。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

現状ですとか、SDGsのゴールとどうマッチングさせるかという検討をされた上で、5つの優先課題を設定されたということだと思います。小泉さんからは、「経済成長」という言葉に違和感があるというご意見でしたが、他に何かありますか。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

同じようなことではありますが、持続可能な開発目標を掘り下げた5つのテーマになるので、この1~5の中で「持続可能な」と付くのは、日本語的におかしい気がします。つけようと思えば、全部つけれますので。「未来を担う人づくり」ができていれば、それは持続可能な社会づくりになると思います。「持続可能な」を取ってしまえばいいと思います。SDGsの根本というのは、経済と社会と環境問題、3つを同時に解決するっていうことですよね。環境だけでも経済だけでもだめで、3つを総合的に解決していくというところがもう少し伝わればいいのかと思います。私は基本的にこの5つでいいと思っています、後は日本語の問題。凄く雑な言い方しますが、1~5の下に17のゴールを紐付けて、個別のアクションプランをつけて、KPIをつければ、できてしまう。ごめんなさい、皆さんを敵にしますが。ぱっと作ろうと思えば、それがよくあるSDGsの民間側の作り方だと思います。それをどこまでドリルダウンするのはわからないですが。基本的な骨子としては、これでいいと思いました。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

先ほど、菅原さんが挨拶の時に言っていたことは本当にそうだと思う、ジェンダーの視点を全部のゴールに入れると言ってしまうと、例えば、「未来を担う人づくり」にもジェンダーの視点は入りますよね。それこそ全部に入るかと思いますが、どうしたらいいかなと悩んでいます。何の回答もないのですが、そこはすごく重要だなと思っています、どのように現したらいいのが難しい。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

鈴木さんがおっしゃったのも本当にそのとおりだと思ひまして、ひとつひとつのゴールがあるだけで、それぞれの連関などが見えてこない。17のゴールが個別に存在するのではなく、ひとつひとつが絡み合っていて連関があるということこそがSDGsの大きな特徴だと思います。そういった意味ではごちゃごちゃしたものができたらいいですね。①の中に②～⑤の視点も入っているだとか。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

難しいですね。分けてしまうと他のところに関係ないのかと思ってしまいますが、そうではないですよ。全部に繋がっていますよね。鈴木さんがおっしゃっていた、同時解決をするには、分けてしまうのもどうかと。

(JICA北海道・野吾 奈穂子)

そのダイナミズムが伝わらなくなってしまいますね。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

だからといって、どう表現していいのかわかんないですが。ごめんなさい、投げてしまいました。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

個別の課題に1つのテーマが当てはまるわけではないですよ。私がそれをよくわかったのが、うちのCSRレポート。一番新しいものを、発行する直前に理事長からSDGsのアイコンをつけるよう指示があり、振りました。こういうふうになると、1個のアイコンだけがつくわけではなく、複数個がまたがつきますよね。タイムリーなのは、生協の上部団体に日本生協連というところがあって、その環境の委員をしていたのですが、自分の事業をSDGsに当てはめて、どれが当てはまるのかと考えるだけでも理解に繋がる。単純に一対一対の対応ではないということ。ですので、文書化する時に誤解されないように、問題は複合的だということを示すことは何かやらないと。ぐちゃぐちゃ過ぎると読んでいて混乱するので、ある程度整理はするけれども、これはAでもありBでもあるところをちゃんと示す。便利なアイコンがあるので、そこら辺を駆使してわかりやすく伝えることが大事だと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

少し時間をおしていますが、もうしばらくお時間大丈夫でしょうか。いいですか。まず小泉さんが手を上げられたので。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

自由学校「遊」で「SDGs×先住民族」という冊子を作りましたが、先住民族の課題とか目標とかを17ゴール全部に絡めて作りました。全てのものが全部のゴールに絡むかということはないと思いますが、多分、女性などは全部に絡むと思います。話しを少し戻してしま

いますが、一つは、ステークホルダーごとに目標との関連を示す切り口がありえるかなと。もう一つは、事業ごととといいますか、取組ごとに目標とどう絡むのか。色々やるとごちゃごちゃになりますが、そういう視点は少し必要かなと思ひまして。

(北海道中小企業家同友会・清水 誓幸)

優先課題というのは5つに羅列する必要がないなというふうに今一度感じていました。もっと複合的なものでいいと思います。言葉としては難しいと思いますが。先ほども意見として言いましたが、逆に、この裏にある課題、問題点の方を明確にする。北海道で起きている問題点のほうだけは絶対に明確にするということをまずはやるべきではないかなと思います。それが表にでてこない限り、それこそ忘れがちになってしまって、取り残されるということに成りかねないので、そこだけは、早い段階で取り組んだ方がいいのではと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

遅れてるところ、取組が中々進んでいないところなどは現状課題のデータをみていく中で出てくるかとは思いますが。例えば、下川町さんでも先進的に色々な取組をされていると思いますが、今の段階で、北海道が音頭をとってビジョンを作るところで、それが市町村レベルでどういう意味をもってくるとお考えになりますか。

(下川町・木原 利幸)

道庁さんで今取り組まれていて、皆さんの言ってることも理解できますし、どちらの立場も非常にわかります。普段、会議の中で私は道庁さん側に座っている人間なので。色々ご意見が出されていますが、うちの2030年の「ありたい姿」というものも、たたき台を作って町民さんに議論してもらうなど、やり方は色々あると思いますが、今回、ゼロベースでやりました。ただ、ゼロベースといっても、僕らがファシリテートできるわけではないので、専門家の方を招いて、その方のご指導の下で進めてきました。まず最初は、SDGsの読み方もわからないというようなレベルからですよ。僕らも含めてですが。まず、その壁を取り払うということが非常に大事だと思います。それがないと普及ができないのかなと。そのファシリテーターの先生は、今を基準にして、「2030年に下川町内に増えていって欲しいものは何か」、「減るべきものは何か」、「変わらずあって欲しいものは何か」という3つの視点で議論していました。非常に入りやすかったです。下川で言えば、森林ですとか、循環型森林経営などをやっていますが、そうすることによって多様な意見が出て、実はそれが色々なものに繋がっている、「繋がり思考」というやり方でやってきました。点ではなく、色々なものが繋がっていて、この地域が成り立っているというようなことをやっていました。そういう意味では非常に入りやすかったと思いました。やっていくうちに皆さんもSDGs自体を非常に理解していきましたし。今度、総合計画が新規になりますので、ゼロから始まりますが、SDGsのありたい姿を総合計画のめざす方向性にしています。今、7つありますけども、この7つの一つ目「みんなで挑戦し続ける町」から「子ども達の笑顔と未来世代の幸せを育む町」まで7つあります。色々な方々が考えたもので、すごく地域の特性がでている

なと思っています。これを総合計画のめざすべき姿に置き換えて、そのためにどういった施策をやっていけばいいのかという考え方でやっていますので、下川町的には非常にタイミングが良かったなど。SDGsでまずありたい姿を定めて、それに総合計画を乗っける。そういう手法をとっています。総合計画のヒアリングなんかを今やっていますけども、その辺をまた町民の皆さんと議論していきたいなど。そういったことで、変に難しくしてしまうと中々入りにくくなるなど。去年の9月、10月頃ですか、広報で毎月1回程、SDGsとは何かから始まって、ずっと町民の皆さんが議論してきたものを広報に出していますが、だからといって、下川の町民みんながSDGsを理解しているかというと、まったくそうではないと思います。まだまだごく一部だと思います。ただ一方で、最近、企業さんと非常にSDGsの関係でお会いする機会が多くなって、お話を聞くと、やはりもう企業では、「投資を得ようと思ったら、SDGsを意識しないととてもじゃないけどやっていけないんだ」というような話しをしていました。やはり、世界目標を会社、企業活動に取り入れていかなければいけないというところがありました。そういったところでも、下川町と一緒に何かできないかというお声がけを非常にさせていただきますけれども。本当にそういったレベルから色々なレベルがあると思います。どこにターゲットをとるとなると非常に難しいと思います。百人中百人理解するというのは、中々できないことだと思いますが、わかっている人達はどんどんやっていけばいいと思いますし、そうではない人達は最初の入り口からしっかり丁寧に関わっていけるような、自分の生活に直接関わる部分もたくさんあるというところを理解できれば入っていけるのかなと思います。自分達の、下川町のそういった取組も振り返って、そう感じたところです。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

現地というか地方自治体、市町村単位での取組が進んでいかないと、実際に物事は進まないのかなと、色々な分野で感じています。道庁の役割と市町村との役割の分担、あるいは道庁が市町村に何ができるか、あるいは市町村が道庁のビジョンづくりに何ができるか、そのようなことがどこかに出てくると面白くなるという気がしました。優先課題ごとにどんな取組、あるいはステークホルダーごとにどんなことを目指すべきなのか、やるべきなのかという話しをしたかったのですが、その中で先ほど言いましたが、農業というのが北海道で一番の産業で、一番の売り。日本の中で唯一自給率が達しているというところで、このビジョンづくりというのに農業サイドから期待することや、農業側でもこんな取組をしているというようなことが何かありますか。

(Ambitious Farm・柏村 章夫)

私達は、次の世代が魅力的に感じる農業をやりたいと思い、色々な事業内容を考えたり、組織体制を考えたり、女性の意見が反映できるような事業、組織作りをしています。後はGAPという、国がオリンピックに向けて取組を進めている、安心・安全、環境配慮、農務管理、人権問題の項目で第三者が認証するといったものを社内に取り組んでいます。農業者からみると、自分達の事業が何かしらSDGsに繋がっていると、皆さんおっしゃってしまし

たが、マッピングを僕たちではできないので、農業でやっている取組が実はこれに繋がっていますよというようなことを分かりやすくしてもらえると、自分達も認識して取り組みます。また、自覚してやるのと、知らないうちにやるというのは違うと思います。自分の事業、本業を通じてどう社会の役に立っているのかというところを分かりやすくしてもらえるとありがたいなというところ。また、本日、専門家といいますが、今までやってこられた方の話しは難しく、中々意見が言えませんでした、誰のためにやっているのかが不明確な中での議論というのはすごく難しく、どのレベルでやるのかというのもありますし、このビジョンを誰に向けてやるのかというのを始めに定めてもらえると意見もだしやすいと思いました。僕自身は内容を読んでいて、「世界の中で輝き続ける北海道」というのはキーワードとしても好きですし、骨子に対しては悪くないなというふうに感じました。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

抽象的な議論が長く続いてしまったので、申し訳なく思いますが、何かいい残されたことはありますか。この後どうなるかというところですが、資料2でいくと、原案の策定に平行して推進ネットワークの立ち上げを目指すというお話がありましたが、我々がお手伝いする、意見を言えるタイミングはありますか。

(石川計画推進課長)

原案を議会に報告する形になりますので、報告前に一度、原案をお示しさせていただいて、それに対して意見交換をやりようと思っておりましたが、今日のボリュームを踏まえると色々、整理しなければいけない部分もありますので、我々の作業の兼ね合いもありますが、なるべく早めに原案のたたき台みたいなものを一度整理させていただいて、集まらないかもしれませんが、早めにお示しをして、それに対して意見をいただきつつ、懇談会を開催する流れになろうかと思っていたところです。この辺りについても、又別途、事前に相談をさせていただければと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

次回に向けての進め方について、ご意見などありますか。

(RCE北海道道央圏協議会・有坂 美紀)

これは公開されるということで、例えば、骨子案を見せながらみんなで考えるオープンな場というのを作ってもいいですか。

(石川計画推進課長)

呼んでいただければ、我々が行って説明することも積極的に対応しようと思えますし、大歓迎でございますので、是非よろしくお願ひします。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

原案はもうすぐ作ってしまうということですか。

(石川計画推進課長)

作業していかないと、議会に報告して、また議会で議論するということになる。白紙で議論にはならないものですから、ある程度は書き込まなければいけないことになると思います。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

仮に原案ができたとしても、例えば、パブリックコメントをしますよね。その辺りに合わせて、色々な人に意見を聞く催しを開くということは、意味合いとしてはあっていますか。

(石川計画推進課長)

正確ではないかもしれませんが、議会に対して報告をするときに、基本的に「こういう考え方で原案を書いている」と説明をする形になります。その中身を変えるとすれば、「こういう理由で変えます」と説明しなければならないので、その説明が議会に対して理解が得られるような理由であれば、変える考えはあります。ただその説明ぶりが、理屈でなければ基本的には変えられない。その違いがあります。今おっしゃられたように、報告したものが後で簡単に変えることができる感じではない。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

例えば、議会には出さなければいけないとしても、「色々なステークホルダーの意見を聞く時間は今回ないので、あくまでも道としてはこう考えていますが、これから様々なステークホルダーから意見を吸い上げて、それを反映させていきたい」というような説明はできますよね。

(石川計画推進課長)

その説明を、懇談会を開催して色々な実践者の方々、取り組まれている方々から意見をお聞きして作っていくという説明にしているところです。皆さんの意見をお聞きして、知恵をいただいて原案を作っていくという整理をしています。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

つまり、今日の話で原案を作るわけですか。

(石川計画推進課長)

ビジョンの対応方向や取組イメージの具体的なアイデアをいただいて原案をつくらうと思っていたところですが、今日はそこまでいっていませんので、先ほど説明しましたように、早めにお示しをして、アイデア・意見をいただいて、原案を作っていくような流れを考えて

います。

(さっぽろ自由学校「遊」・小泉 雅弘)

私の理解では、直接策定に関わるのはこの懇談会かもしれませんが、それでは足りない。様々なステークホルダーと共有するビジョンを作るには、足りないというのが今回色々な形で出されたと思います。だとすると、例えば、ステークホルダー別の「ビジョンを考える会」などをやる必要があると思っています。それを道庁さんにやって欲しいというわけではなく、自分達でやれないかなと思っています。そういうことを前提に、議会にも説明してもらえるといいかなと思います。これはネガティブなことではないと思います。ちゃんと意見を聞いた上でビジョンを作りたいと。これはそういうビジョンだという流れでやっていただきたい。それなりに労力をかけてやるとしたら、それだけ意味があるものでないと、自分達もそうですし、集まってきた人達も何言わされているかよく分からないという話しになりますよね。そこが何らかの形で反映されるということを道の人にも共有してもらいつつ、それが全て反映されるかどうかは別にして、そういうことを道としても考えているというスタンスを示してもらえると。

(石川計画推進課長)

おっしゃるとおりだと思いますので、我々、皆さんを通じていただいた意見というのは、最大限尊重しながら、一緒に作るという思いを持ってこの会議を開いていますので、そういった思いは可能な限り取り入れていきたいと思っています。

(さっぽろ青少年女性活動協会・菅原 亜都子)

資料3-3のブランクになっているところは、懇談会で案を出すのではなく、道庁さんで作文するということですか。

(石川計画推進課長)

後でお願いしようと思っていましたが、そこは皆様にお聞きしたいと思っています。ですので、どこのタイミングになるかはこれから調整しますけれども、個別にお聞きしようと思っています。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

我々はブランク部分の意見を出すときに、できる限り自分のネットワークを使い、色々な人の意見を聞いて、知恵を集める努力をしなければいけないということですね。

(石川計画推進課長)

これしか示していないので、どのように書くか、イメージがあまり湧いていないと思いますので、フォーマットみたいなものをお示ししますので、「こんなことが考えられますね」、「こんな事例を知っています」といった具体的な中身を教えてもらえれば。それをベースに

作れるかなと。そこは早めに相談させていただこうと思います。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

公式のプロセスとしては、10月にパブリックコメントがあるので、そこでどのような意見がでてくるかというのを改めて考えなければいけないということと、その当たりで、市町村と意見照会といった所謂オフィシャルなプロセスだけではなくて、地域に出かけて説明会みたいなものをやるということをお考えいただけるといいかなという気がいたしました。

(JICA北海道・野吾 奈穂子)

資料3-3の組み立て自体も、もしかしたら見直しされるかもしれないということですね。

(石川計画推進課長)

そうですね。

(谷内計画推進担当局長)

資料3-3はあくまでも、議論の参考として作ったものです。優先課題があって、それがどう繋がっているのかをこちらに示したというだけの資料で、これをベースに議論いただければという参考の意味合いで作ったものです。本当は我々のビジョンの原案みたいなものがあれば、もっとイメージが沸くのかもかもしれませんが、今日はそこまで至らなかった。今日は、このビジョンの対応方向や取組イメージをそれぞれ教えてくださいという直接的なものでもなく、この場で色々出てきた意見があれば、それを吸い上げていこうかなという意味合いもありました。そういった意味で、もう一度、何かご意見などをお寄せいただけるようなやりとりを考えてみたいと思います。

(JICA北海道・野吾 奈穂子)

ありがとうございます。冒頭でも申し上げたように、JICAでも17のゴールそれぞれに対応するポジションペーパーを作成していますので、参考に見ていただければ。我々も感想やフィードバックをいただきたい。ここでは、現状分析と我が国の取組、JICAの持っている強み、特に注力するターゲット、といった書き方をしています。先ほど話しにでていた経済・社会・環境の同時解決が十分に書き切れていないところもあるかもしれませんが、参考資料としてご紹介でした。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

資料3-2の指標は、計画推進課さんだけで考えているものですか。私、農政部さんや環境生活部さんと仲良しなんですけど、各部局の意見は集約されていますか。

(渡邊計画推進課主幹)

基本的に既にある計画などから持ってきているものですが、各部の確認はこれから行う予定です。

(コープさっぽろ・鈴木 昭徳)

各部に意見を聞いて上げてもらえれば、また少し違ったものがでるのかなと思った次第です。

(酪農学園大学・吉中 厚裕)

時間を超過してしまいましたが、活発な意見交換をいただきました。本当にどうもありがとうございます。先ほどお話がありましたが、我々の責任は続くようですので、頑張りたいと思います。どうぞ、よろしく願いいたします。では事務局にお返ししたいと思います。

(石川計画推進課長)

本日は本当に長時間にわたりましてありがとうございました。これをもって本日の懇談会は終わりますけれども、また色々な面でご相談をさせていただきながら、このビジョンを少しでもいいものになるようにしていきたいと思っています。次回の正式な懇談会としては8月下旬くらいを予定しております。また、事前に調整をさせていただければなと思いますので、よろしく願いいたします。また、事前にお知らせをさせていただいておりましたが、本日18時から懇親会を開催したいと思っていますので、ご出席をされる皆様には大変申し訳ありませんが、お付き合いをいただければと思っています。本日はこれをもって閉会とさせていただきます。ありがとうございました。

以上